

伸吟する「Journalist」・芥川龍之介

—「上海游記」序説—

相川直之

はじめに

大正一〇年三月三〇日、上海を訪れた芥川龍之介は、それから約一ヶ月間の滞在をした。その時の出来事を中心として、「上海游記」（大正一〇・八・一七—九・一二『大阪毎日新聞』、大正一〇・八・二〇—九・一四『東京日日新聞』）は執筆された。小説とは違った紀行文の執筆に、芥川は如何なる工夫をしたのか。また、この紀行文執筆の経験は、後の文学観にどういふ影響を与えたのか。これらの事を考察するのが本論の目的である。

なお、芥川龍之介のテクストは、特に指定がない限り、『芥川龍之介全集』（全二四巻、平成七・一一—一〇・三、岩波書店）による。また、引用本文の傍点も特に指定がない限りすべて引用者の手による。

—

芥川の死から五年後、横光利一は『上海』（昭和七・七 改造社）を著した。その横光が、生前の芥川から強く上海行きを勧められていたことは、周知の通りである。「私に上海を見て来いと云つた人は芥川龍之介氏である。氏は亡くなられた年、君は上海を見ておかねばいけないと云はれたのでその翌年上海に渡つてみた」⁽¹⁾「芥川龍之介氏は上海へ行くことばかりに頭が廻つて困ると私にこぼしたことがある」⁽²⁾。これらの横光による証言を見ると、上海とそれに付随する「政治」とに、芥川は強い関心を持ち、帰国後、その重要性を説いていた様子が窺える。この事実と、帰国後に芥川が著した、「將軍」（大正一一・一『改造』）や、「桃太郎」（大正一三・七『サンデー毎日』）が内包する社会批評的な視点とを関わらせながら、「上海で三人の文人政治家に会い、中国をめぐるさまざまな政治的議論を交わしたことは、芥川の帰国後の精神生活に強い影響を及ぼすことになる」と関口安義氏は位置つける⁽³⁾。

関口氏の指摘は正鵠を得たものである。しかしながら、「上海游記」自体は、「政治」的な議論の周縁を低徊している。例えば、革命思想家章炳麟との談話を紹介した場面では、「徹頭徹尾、現代の

支那を中心とした政治や社会の問題」を話題としながらも、「章炳麟氏はしつかりなしに、爪の長い手を振りながら、滔滔と独得な説を述べた。私は「唯寒かつた」と述べ、さらに文章の結びには、「私は耳を傾けながら、時々壁上の鰐を眺めた。さうして支那問題とは没交渉に、こんな事をふと考へたりした。―あの鰐はきつと睡蓮の匂と太陽の光と暖な水とを承知してゐるのに相違ない。

して見れば現在の私の寒さは、あの鰐に一番通じる筈である。鰐よ、剥製のお前は仕合せだつた。どうか私を憐んでくれ。まだこの通り生きてゐる私を。……」と記す。それぞれ眼前の政治的議論から意識が離れ、特に後者については空想の世界に遊ぶ芥川自身を書きとめている。

また、書道家で、「大清帝国の遺臣」、後に満州国の國務総理となる、鄭考胥との会見でも、

氏を加へた我我は、少時支那問題を談じ合つた。勿論私も臆面なしに、新借款団の成立以後、日本に対する支那の輿論はとか何とか、柄にもない事を弁じ立てた。―と云ふと甚不真面目らしいが、その時は何も出たらめに、そんな事を饒舌つてゐたのではない。私自身では大真面目に、自説を披露してゐたのである。が、今になつて考へて見ると、どうもその時の私は、多少正気ではなかつたらしい。尤もこの逆上の原因は、私の軽薄な根性の外にも、確に現代の支那その物が、一半の責を負ふべきものである。もし讒だと思つたら、誰でも支那へ行つて見るが好い。必一月とある内には、妙に政治を

論じたい気がして来る。あれは現代の支那の空氣が、二十年來の政治問題を孕んでゐるからに相違ない。私の如きは御丁寧にも、江南一帯を経めぐる間、容易にこの熱がさめなかつた。さうして誰も頼まないのに、芸術なぞよりは数段下等な政治の事ばかり考へてゐた。

とあるように、上海滞在時、「政治」に没頭していた自分を、過去の狀態として距離を置いている。加えて、帰国後に会談を回想している自身を写して、「氏と相對してゐた何分かは、やはり未に懐しい気がする。私はその何分かの間、独り前朝の遺臣たる名士と相對してゐたのではない。又実に支那近代の詩宗、海藏樓詩集の著者の聲咳に接してゐたのである」と会談を、詩人と過ごした一時として懐かしんでいる。

二

大阪毎日新聞社社員が、芥川の「支那」旅行における身分であつた。同新聞社の学芸部長を務めていた薄田泣菫宛て、大正一〇年三月二日付書簡には、旅費や日程について細々とした取り決めが確認されている。同じく三月二日の『読売新聞』には、「芥川龍之介氏 本月中旬出発 『大阪毎日』新聞社からの特派員として朝鮮及び支那視察の途に就く」という記事が見られる。

この任務について泣菫に次のような決意を伝える書簡がある。

一昨日精養軒の送別会席上にて里見淳講演して曰「支那人は昔偉かつたその偉い支那人が今急に偉くなくなるといふことはどうしても考へられぬ支那へ行つたら昔の支那の偉大ばかり見ずに今の支那の偉大もさがして来給へ」と私もその心算であるのです⁽¹¹⁾

ここで、当時の「支那」の状況をまとめるならば、一九一一年の辛亥革命を経て、宣統帝が退き、中華民国として近代化が進められようとしていた。その中華民国に対して、一九一五年「二一か条要求」を日本は提出。これを受けた抗議運動として、五・四運動が一九一九年に起こり、排日の気運は高まつていた。このような状況の中で、章炳麟などの知識人との会見をするのであるから、自ずと周囲から期待されているのが、政治的な議論であることは、察するに難くない。

右のような「支那」の状況に注目し、問題意識をもつたのは、『大阪毎日新聞』に限ったことではない。

『読売新聞』には、「上海遊記」と同時期に、殷汝耕「目覚めたる支那より親愛なる日本国民へ」が連載された。この文章で紹介される上海像は、活き活きと躍動する経済都市である。まず、「支那は政治に依りて破壊された併し経済に依りて再建されつゝある私は親愛なる日本国民に向ひて先づ此点に対する着眼を求めたい⁽¹²⁾」、として「支那」の経済活動の様子を紹介している。その中から、上海に関する記述を以下に引く。

支那の新人達の実業界に於る活動は寔に眼覚しいものである、上海の商務總會に幹部たるものはもと五十歳六十歳といふ老年者で多くは買^{コンツェルン}辦上りであつた併し今日では若い新しい知識の所有者が之れに取つて代つて居る紡績、製粉製糸、綿花、栽培其他の事業に於ても然りである、それだから上海などへ行つて見て分ることは事業界が小規模ながら何処となく活気横溢といふ趣がある様に見える⁽¹³⁾。

現在上海に交易所の数が四十数箇所信託会社が十三四箇所を数へ総資本一億五千万元と註せられる(略)之れが為め資本の流通速度を増し資本家の企業心を刺戟する事夥しきものあるは之れを認めずには居られぬ⁽¹⁴⁾。

また、『東京朝日新聞』には、「支那の改造は、早晚支那自身の手によつて為し遂げらるべきものであつて、列強の干渉によつて、絶対に為され得べきものではない。干渉論はたとへそれが列強の善意であるにせよ、極力排斥されねばならぬ。干渉論者の論拠は、支那を観察する根本に於て、大なる誤謬があると思ふ。今是等の誤謬を検討して、干渉論の謂はれなきことを指摘するのが本論の主旨である」として、自説を展開した北京特派員大西齋の「支那の核心を觀よ対支干渉論を排す」が掲載された⁽¹⁵⁾。そして、政治的に不安定に映る「支那」の国情を次のように説明している。「如何なる危険思想をも国民生活を調和させ悠々迫らざる処に、支那社会の偉大さがある。今日と雖も支那民族の生活を包む社会其物は依

然として偉大である」。

芥川が送り込まれようとしていた「支那」は、まさに政治的・経済的に、人々の関心を集めていた、報道されるべき現場だったのである。

三

流動的な政治情勢を前にして、芥川は「特派員」に成りきって来たかのように見える。後に、「上海游记」を含む「支那」旅行の紀行文を、『支那游记』（大正一四・一一 改造社）として単行本にしたときに、芥川は序文で次のように述べている。

「支那游记」一巻は畢竟天の僕に恵んだ（或は僕に災ひした）Journalist 的才能の産物である。（略）しかし僕のジャアナリスト的才能はこれ等の通信にも電光のやうに、一少くとも芝居の電光のやうに閃いてゐることは確である。

しかし、「上海游记」が、当時言及して当然と思われる、政治的議論を話題の中心としなかったことは、先に見た通りである。このことについて、紅野敏郎氏は、「芥川のいうジャーナリスト的才能とは何であつたか。時代はさがるが、『中国の赤い星』を書いたエドガー・スノーの如きジャーナリストの才能とは趣を異にしていたことはたしかである。動きつつある中国、苦悩する中国、つまり現実の中国への熱い関心、もしくは猛烈な好奇心につき動か

されての執筆というよりは、中国の風物、雰囲気、名所旧跡への興味がより強く働いての執筆となつている。この中国旅行がいわゆる大正八年の五・四運動のあとだったにもかかわらず、である。（略）社会革命をもたらすためには『プロバガンダに依らざるべからず』と主張する『若き支那』の代表者李人傑の概要やその風貌は伝えても、その心の奥底に入りこんでの鋭い一瞥の記事はない。』と述べる。また、趙夢雲氏も、「列強に蚕食されつつあつた上海—そこで中国の情報を収集・分析し、そこから現状を正確に把握し未来を展望するといったジャーナリスト的な作業は、『上海游记』に限つていえばまったく見られない。芥川の自負した『ジャーナリスト的才能』は、結局、彼の甘さ、自惚れでしかなかったのではないか。とだいわずか四カ月の駆け足旅行で、しかも中国人の言葉のわからない一作家にそれを要求したこと自体が無理であつたのかもしれない」と批判する。

芥川は、新聞社社員という肩書きの上で、「ジャアナリスト」の一員ではある。しかし、芥川が使う「ジャアナリスト」という言葉の意味には、「災ひした」とあるように、含む所があるようである。それは何か。

この問題を考察するにあたって、大正六年からの文壇での思潮を参考にすることができる。

「新聞紙及新聞記者論」（大正六・一〇『新時代』）において、法学博士浮田和民は、「新聞紙は道徳家には不必要なものである、何となれば之を読む毎に多少精神上の潔白を害さるるからである。新聞紙は学者にも無用なものである。何となれば之を読んでも一

つも真理を発見することが出来ないからである。又政治家にも新聞紙は不必要なものである。真に天下国家を思ふ政治家には新聞紙の必要がない。何となれば新聞紙に依つて碌な政治が行はれるものでないからであつて、真の政治家は多忙なるが為に新聞紙を読む暇さへない筈である。」「新聞紙に書いてある事は十中八九迄は嘘である針小棒大の記事である」と見るべきは正当である。』として新聞の存在自体を全面的に否定する見解を示した。しかし、この浮田の発言は、批判の具体性を欠き、また直情的であつたために、東京朝日新聞記者杉村広太郎「浮田博士の新聞紙論を読むで其の猛省を促す」(大正六・一一『中央公論』)によつて、徹底的な反駁をされる。

この論争以外でも、文壇では所謂ジャーナリズムに反感を持つ秀田気があつた。生田長江「通俗芸術の問題」(大正六・二『新小説』)は、冒頭で次のように述べる。

この題目は、シアアナリスティックにあまり気の利いたものではない。そのために多数の読者諸君の興味を惹かないでしまふことを、私は先づ第一に心配する。／＼しかし乍ら、私は如何なる場合に於ても、所謂輿論と称するものに追隨して行くことをしない。私は批評家の良心に従つて、寧ろ好んで異を樹てると云はれることを欲する。²²

この用例では、「シアアナリスティック」なるものが、「読者の興味」や「輿論」と密接な関係にあり、また、いたずらに追隨す

ると、「批評家の良心」を蔑ろにする場合もある、という意味で使われている。

また、中村星湖「最近小説界の傾向」(大正六・一〇『新時代』)には、「時代の推移につれて、さまざまの新人が勃興して来るのは当然であつて、その種の部分的の現象はちよい／＼見受けられないではない。例へば(略)『白樺』の人々が、多少ジャナリズムの道具に使はれた事實はあるとしても、それ／＼の面目を明瞭に文壇の表に現はして来た如きである」、²³という用例がある。ここでの「ジャーナリズム」は、商業主義的存在として捉えられているようである。

中には、本間久雄のように、「今日にあつてはジャーナリズムが真正の文学の発達を阻害するといふことなどは全く問題ではない。一切の文学はジャーナリズムの啓発と是正とを待つて始めてその正しい発達を遂げ得るといふのが事實である。ジャーナリズムを外にして文学の発達を求め得ないといふのが事實である。或は一歩を進めて真正の文学はジャーナリズムの中からのみ求められると云つてもよい」、と擁護の立場をとるものもいた。

しかし、「ジャーナリズム」に対する反感は、やはり根強かつたようである。水上瀧太郎は、「貝殻追放 新聞記者を憎むの記」(大正七・一『三田文学』)で、新聞に捏造記事を書かれた自身の体験を紹介した上で、「自分は決して新聞記者を、社会の木鐸などと考へてゐないが、彼等が此の人間の形造る社会の出来事の報告者であるといふ職分を尊いものだと思ふのである。然るに憎む可き賤民は事實の報告を第二にして、最も挑発的な記事の捏造にの

み腐心してゐる。さうして新聞記者といふものに対して、適當なる原因の無い恐怖をいだいてゐる世間の人々は、彼等に対して正當の主張をする事をさへ憚つてゐて、相手が新聞記者だから泣寝入りのほかはないと、二言目には云ふのである。それをいゝ事にして強もてにもてゐる下劣なるごろつきを自分は徹頭徹尾憎み度い。同時にこれらの下劣なるごろつきの日常為しつゝある悪行を、寧ろ奨励してゐる新聞社主の如きも人間社会に対する無責任の点から考へれば、著しく下劣なる賤民である。自分は単に自身迷惑した場合を挙げて世に訴へようとするのではない。それよりも一般の社会に悪を憎み、これに制裁を加へる事を要求鼓吹し度いのだ」と反感をあらわにする。

そしてまた、平林初之輔「一兵卒の立場から」(大正九・一一『新潮』)は、文学と「ジャーナリズム」との関係について次の見解を示す。

ジャーナリズムは何といつても文学を悪化する。最近某雑誌は其小説欄を労働小説号といつた風のものにし、某雑誌は性慾文学を鼓吹した。けれども雑誌の生命は近頃では一ヶ月と相場がきまつた。一ヶ月毎に目先を変へてゆくのが編輯者の苦心となり、その変へ方が宙返りに著しければ著しい程編輯者の技倆が優秀であることになつた。(略)ジャーナリズムが雑誌の附録文芸まで一しよに引つ張り廻さうとするに至つてはあまりな暴挙である。こんな場合にこそ藝術の独立を高唱していゝ筈である。人類の幸福に関する問題には脱兎の如き勇を示した芸術家

がジャーナリズムには処女の如き盲従を敢へてしてゐるのは錯誤の甚だしいものである。元來普通の営利雑誌が一定の主義によつて動くといふやうなことはあり得ない。

このように、芥川が新聞社社員として「支那」へと旅立とうとしていた時期には、新聞の報道姿勢に対する批判、また「ジャーナリズム」と文学との関係が問題視される思潮があつた。芥川にとつても、これらの議論を無視できなかったらうと考えられる。

「ジャーナリズム」をどのように考えていたかについて、芥川の明確な発言は見られない。しかし、旅行の直前に、置き土産のように書かれた、「奇遇」(大正一〇・四『中央公論』)では、芥川らしき「小説家」が「編輯者」と次のような会話をしている。

小説家 (机の抽斗を探しながら) 論文ではいけないでせうね。
編輯者 何と云ふ論文ですか？

小説家 「文芸に及ぼすジャナリズムの害毒」と云ふのです。
編輯者 そんな論文はいけません。

この部分は、物語の導入部であつて、全体からすれば枝葉にあたる。しかしながら、芥川がこの一文を書いたことには、そこに皮肉な意味合いが読みとれたものと思われる。中村星湖は、この部分に言及して、次のように記している。「芥川龍之介氏の『奇遇』(略)はそのあとさきに附いてゐる小説家と編輯者との問答だけを読んだ、そして中身を読まなかつた。中身を輕蔑したためでは

なく、前書き後書きを尊敬したためである」として右の「奇遇」本文の後二行を引用し、「こゝを書きながら作者はニヤリと笑つたであらう、こゝを校正しながら編輯者は……笑つたか怒つたかわたしは知らない。が、多分笑つたでせうなあ、豪傑笑ひに似た編輯者笑ひといふ奴で」。

小説家でありながらも、同時に「ジャアナリズム」の一員である芥川は、星湖が想像するように、苦笑せざるを得ない立場にあった。そして、「上海遊記」執筆は、こうした自らの鵝的立場を昇華するねらいもあつたのではないだろうか。

四

大正一〇年五月一〇日の『時事新報』には、「芥川龍之介氏から」という見出しで、次の文章が掲載された。

鄭考胥、章炳麟などの学者先生に会つた。鄭先生などは書ではずつと前から知つてゐたから会つた時にはなつかしい気がした。章先生も同様。この先生はキタナ好きなものだから細君に離婚を申込みましたさうだが、襟垢のついた着物を着て古書堆裡に泰然としてゐる所は如何にも学究らしかつた。——上海 四月廿六日——

これは、当時『時事新報』の文芸欄を担当していた、佐佐木茂索に宛てた、大正一〇年四月二六日付の書簡が掲載されたもので

ある。芥川は、同年五月二日付で佐佐木に、「僕の通信は時事には発表しないでくれ給へ社の方がよかましいから」と書き送つていゝ。しかし、右の掲載を止めるには間に合わなかつたようである。

『大阪毎日新聞』に限らず、芥川の「支那」行きは、広く世間の注目するところであつた。帰国後、こうした周囲の期待と新聞社に対する義務とに応えるべく、「上海遊記」は書かれた。

飽くまで海外旅行初心者の視点から、上海を描出することに芥川は心をくだいたようである。「私は昼間村田君に、不要と云ふ支那語を教はつてゐた。不要は勿論いらんの意である。だから私は車屋さへ見れば、忽悪魔払ひの呪文のやうに、不要不要を連発した。これが私の口から出た、記念すべき最初の支那語である。如何に私が欣然と、この言葉を車屋へ抛りつけたか、その間の消息がわからない読者は、きつと一度も外国語を習つた経験がないに違ひない」、「私は四十起氏の跡につきながら、滅多に側眼もふらない程、恐る恐る敷石を踏んで行つた」、などといかにも不慣れな姿が示される。そして、それ故に、日本との相違に敏感になるといつていゝようでもある。例えば、「私は彼に、玉堂春は面白かつたと云ふ意味を伝へた。すると彼は意外にも、『アリガト』と云ふ日本語を使つた。さうして——さうして彼が何をしたか。私は彼自身の為にも又わが村田烏江君の為にも、こんな事は公然書きたくない。が、これを書かなければ、折角彼を紹介した所が、むざむざ真を逸してしまふ。それでは読者に対しても、甚濟まない次第である。その為に敢然正筆を使ふと、——彼は横を向くが早い、真紅に銀系の繻をした、美しい袖を翻して、見事に床の上へ

手漬をかんだ⁽³²⁾、という部分を見てみると、伝えた出来事は役者の緑牡丹が、客である自分たちの前で鼻水をかんだことに尽きる。しかし、それに驚きをもって気付き得るのは支那通の者ではなく、初心の眼なればこそである。そして、何故にこうしたことを記述するかというと、「支那」の「真」の姿を報告しようという目的があつたのである。

類例として、湖心亭を訪れた場面を以下にひく。

その露路を向うへつき当ると、噂に聞き及んだ湖心亭が見えた。

(略) 我が丁度其処へ来た時、浅葱木綿の服を着た、辯子の長い支那人が一人、一ちよいとこの間に書き添へるが、菊池寛の説によると、私は度度小説の中に、後架とか何とか云ふやうな、下等な言葉を使ふさうである。(略) しかし支那の紀行となると、場所その物が下等なのだから、時時は礼節も破らなければ、澆漓たる描写は不可能である。もし譁だと思つたら、試みに誰でも書いて見るが好い。―そこで又元へ立ち戻ると、その一人の支那人は、悠悠と池へ小便⁽³³⁾をしてゐた。

隣国をして、「下等」と呼んで憚らない所には、確かにこのテクストの時代的な限界がある。しかし、この章はそれだけにとどまるものではない。以下の文章が前の引用箇所⁽³³⁾に続く。

陳樹藩が叛旗を翻さうが、白話詩の流行が下火にならうが、日英同盟が持ち上らうが、そんな事は全然この男には、問題にな

らないのに相違ない。少くともこの男の態度や顔には、さうといふ思はれない長閑さがあつた。曇天にそば立つた支那風の亭と、病的な緑色を拵げた池と、その池へ斜めに注がれた、隆隆たる一条の小便と、―これは憂鬱愛すべき風景画たるばかりぢやない。同時に又わが老大国の、辛辣恐るべき象徴である。私はこの支那人の姿に、しみじみと少時眺め入つた。が、生憎四十起氏には、これも感慨に価する程、珍しい景色ぢやなかつたと見える⁽³⁴⁾。

孫文の革命を妨げた陳樹藩、文化革命の具体策であつた白話詩の衰退、そして、これからも「支那」を圧迫せんとして画策される日英同盟の続行案。当時の一部知識人達が目指した国家のあり方からすれば、逆風となる出来事が次々と起こつていた。しかし、「老大国」全体の雰囲気には、この男のように「長閑さ」がある。これを「辛辣恐るべき象徴」ととらえて憂いつつ、感慨に耽る芥川は、ここで密かに「政治」を語っているといえよう。また、現地邦人の島津四十起にとつては「感慨に価する程、珍しい景色ぢやなかつた」、とあるので、まさに旅人である芥川であればこそ、見出し得た感想といえよう。

上海滞在中、実際「政治」に心を奪われていたのであれば、それを重視して文章化することもできたであらう。しかし、「政治」を「芸術なそよりは数段下等」として、中心的素材としなかつた所以は、無言の内に政治的議論を要求してくる、「ジャーナリズム」に迎合することへの、小説家としての反抗であつたと思われる。「文

章規範や唐詩選の外に、支那あるを知らない漢学趣味は、日本でも好い加減に消滅するが好い」というように、文章の主眼は、先入観をなるべく除き、「真」の「支那」を伝える事にあつた。芥川自身が捉えた同時代の「支那」の生々しい側面を、「澆漓たる描写」で表現する行為こそが、小説家と、「ジャアナリスト」とを、昇華し、具体化した表現であつたのではないだろうか。

五

「上海遊記」には、不浄に関する記述が頻出する。

これに不快感を隠さない評者は多い。「多国の蹂躪の下での中国人の貧困な生活を同情、理解するどころか、劣等民族を見下すような嫌悪の目付きでそれを嘲っている。彼の目的は中国の苦難と『醜』を収集して日本国内の喝采を得ようとするのである」とし、祝振媛氏の手厳しい批判がある。しかし、芥川はただの興味本位で、このようなことを書いたのであろうか。

参考として、一九一八年三月九日の、当時日本に留学していた周恩来の日記を引く。日比谷公園を散歩しているときの記述である。「あるところに歩いていくと、二人の女の小学生が地面にうずくまって土を盛り上げているのが目に入った。中国の子どもが土と遊ぶのと同じだと思つた。近寄つて見ると、なんとよそから無用の草を持ってきて植えながら遊んでいるのだ。／＼このように見ると、日本の小学校の教師が本当に教育的な能力を有していることが分かる。中国の子どもが遊んでいれば、かならず自分の

尿を水にして泥を捏ねなければならぬ。子どもには知識がなく、この種の指示はすべて家長や教師が教えなければならぬ。(略)一つのことから類推して、日本の国民が中国人を軽蔑するのも不思議ではないし、日本の知識は実に子どもころから鍛えあげられたものなのだ」。この周恩来の驚きは、上海での芥川の驚きと表裏の関係にあると思われる。不浄即ち衛生の話題は、国家間の格差の問題に直結し得る。ただに、嘲笑するために素材としたのではなさそうである。

また、芥川の表現技法の一つと見ることもできる。「西方の人」(昭和二・八『改造』)、「22 詩人」では、次のように記されている。

クリストは一本の百合の花を「ソロモンの栄華の極みの時」よりも更に美しいと感じてゐる。(尤も彼の弟子たちの中にも彼ほど百合の花の美しさに恍惚としたものはなかつたのであらう。)しかし弟子たちと話し合ふ時には会話の礼節を破つても、野蛮なことを言ふのを憚らなかつた。「凡そ外より人に入るもの人を汚し能はざる事を知らざる乎。そは心に入らず、腹に入りて廁に遺す。すなはち食ふ所のもの潔れり。」……

「会話の礼節」を破り、不浄な話題をしつつ、弟子を教え諭す「クリスト」の話術と、上海の湖心亭の場面を写して、「時は礼節も破らなければ、澆漓たる描写は不可能である」としつつ、「支那」の現状を伝えた芥川とは、相通するところがある。侮蔑する気持

を表出するために記したというより、「支那」の姿を伝えるための方法だったものと思われる。

しかしながら、そうした一方で、「上海遊記」には、「交通整理の行き届いてゐる事は、いくら鼻眼に見た所が、到底東京や大阪などの日本の都会の及ぶ所ぢやない。車屋や馬車の勇猛なのに、聊恐れをなしてゐた私は、かう云ふ暗れ晴れした景色を見てゐる内に、だんだん愉快な心もちになつた」、「舞踏場は可也広い。が、管絃楽の音と一しよに、電燈の光が青くなつたり赤くなつたりする工合は如何にも浅草によく似てゐる。唯その管絃楽の巧拙になると、到底浅草は問題にならない。其処だけはいくら上海でも、さすがに西洋人の舞踏場である」、「料理は日本よりも旨い。聊か通らしい顔をすれば、私の行つた上海の御茶屋は、たとへば瑞記とか厚德福とか云ふ、北京の御茶屋より劣つてゐる。が、それにも関らず、東京の支那料理に比べれば、小有天なぞでも確に旨い。しかも値段の安い事は、さつと日本の五分の一である」、などのように日本と相対化して優れた所も芥川は紹介している。芥川が上海を見るにつけて、中立に近い視点を持っていたといえるのではないだろうか。

後年の書簡で、「長崎へ来たらちよいと上海へ行きたくてな^{らぬ}」、と述べた芥川は、上海という都市に、素人ではあつたが愛着を持って観察をしていたのである。

おわりに

普段の小説を書く場合と比べて、「上海遊記」執筆は、芥川の心構えに違いがあつたようである。「上海紀行の諸体を兼備するはあゝする方が楽な故なり 小説は坂路を下る如く紀行は平地を行くが如しあたり前に書いてゐては筆者最も退屈なり 誤つて感心する事勿れ」と、その両者の違いを芥川は述べている。そして、「支那」の紀行文執筆は、相当苦痛であつたようである。

明星御発刊のよしまづ御よろこびを申上げますそれから私も同人の一人に加へ下すつたよし御厚意難有く御礼申しますしかし明星は同人以上に執筆を許さない雑誌でせうかもしさもなくば私は同人の列に加はらずに寄稿したいと存じますと云ふのは私の我ままですが、どうも同人と云ふ名から生ずる束縛の感じが苦しいのですたとひ實際は自由であつても兎に角同人一人前の責任を持つのが苦しいのですいや責任は持たなくても責任のありさうな気がする事がそれ自身もう苦しいのです私は既にその点では大阪毎日新聞社員と云ふ、厄介な荷を背負つてゐますですからもうこの上にはなる可く気楽にしてゐたいのです

これらの書簡を見ると、新聞社の社員としての責任に圧迫感を感じながら、呻吟しつつ紀行文を書いている様子が目に浮かぶようである。

しかしながら、この「 ज्याアナリスト」体験は、関口安義氏による指摘の外にも、文学観の上において、新しい境地を開くこと

になったものと思われる。

先に引いた、『支那遊記』自序で、「僕のジャアナリスト的才能はこれ等の通信にも電光のやうに、一少くとも芝居の電光のやうに閃いてゐる」と、述べているやうに、換言すれば華々しく短期間だけ人々の注目を集める「ジャアナリズム」の性質は、実はそのまま小説にも通底する、と芥川は考えた。

小説は、一怖らくは戯曲も頗るジャアナリズムに近いものである。もし厳密に云ふとすれば、一人の作家なり、一篇の作品なりは、一時代の外に生きることが出来ない。これは最も切実に一時代の生活を表現する為に小説の支払ふ租税である。前にも一度云つた様に、あらゆる文芸の形式中、小説ほど短命に終るものはない、同時に又、一面では小説ほど痛切に生きるものはない。従つて又、その点から見れば小説の生命は抒情詩よりも、更に抒情詩的色彩を帯びて居る。つまり小説と云ふものは、丁度稲妻の光の中に僕等の目前を掠めて飛ぶ火取虫に近いものなのだらう^(4,5)。

芥川の語彙としての「ジャアナリズム」について石割透氏は、「芸術は時代を超えて永遠であるという古典主義者のな信念の動搖、芥川のいかにも大正的な芸術家意識の崩壊がここから指摘できる。そこにはまた、文壇の流行作家として生きてきた悔恨を伴つた自嘲も感じられる」と指摘される。確かに、一時的な挫折を芥川は味わつたであろう。しかしながら、後年の文学活動を見ると、小

説が短命であるからこそ、その時にしか書けない文章を残そうという、一種の達観を得たのではないだろうか。

芥川が、死後に読まれることを想定して書き残した、『或阿呆の一生』(昭和二・一〇『改造』)などの遺稿群の、読まれるときの状況に依存した性質を、説明するヒントがここにあるのではないかと思われる。これについては、稿を改めて考察したい。

注(1) 横光利一「静安寺の碑文」(昭和一二・一〇『改造』)、『横光利一全集第十三巻』四一四頁。

光利一全集第十三巻』四一四頁。

(2) 同前、「北京と巴里(覚書)」(昭和一四・二『改造』)、『同前』、四二九頁。

同前、四二九頁。

(3) 関口安義『芥川龍之介とその時代』(平成一一・三 筑摩書房)、四二二頁。

書房)、四二二頁。

(4) 『芥川龍之介全集第八巻』、三三三頁。

(5) 同前、三四頁。

(6) 同前、三四—三五頁。

(7) 同前、三八頁。

(8) 同前、三九—四〇頁。

(9) 同前、四一頁。

(10) 芥川は、大正七年二月から大阪毎日新聞社社友となり、大正八年三月には、海軍機関学校の職を辞して、同社社員となつた。「今芥川氏は、月に三十枚位のを二つも書けば二百円になる。それに『大阪毎日』の社員として月給百

- 円を頂戴してゐる。」(裝飾ママ、IM生「原稿料の話」(大正九・一『文章俱樂部』、引用本文は『編年体大正文学全集第九卷』(平成一三・一二)ゆまに書房)、四〇〇頁)という記事がある。また、芥川の文章に「僕は上海へ渡る途中、筑後丸の船長と話をした。政友会の横暴とか、ロイド・ジョオジの「正義」とかそんなことばかり話したのである。その内に船長は僕の名刺を見ながら、感心したやうに小首を傾けた。／「アクタ川と云ふのは珍らしいですね。ははあ、大阪毎日新聞社、やはり御専門は政治経済ですか?」／僕は好い加減に返事をした。」(「澄江堂雜記 船長」(大正一三・三『隨筆』)、芥川龍之介全集第一〇巻 二八六頁)とあり、肩書きとしても新聞社の名を使つていたようである。
- (11)「大正一〇年三月一日付薄田泣菫宛書簡」、芥川龍之介全集第一九巻、書簡番号九三〇番。
- (12)殷汝耕「目覚めたる支那より親愛なる日本国民へ(一)」(大正一〇・八・二三『読売新聞』)。
- (13)同前、「(四)」(大正一〇・八・二六『読売新聞』)。
- (14)同前、「(五)」(大正一〇・八・二七『読売新聞』)。
- (15)北京特派員大西齋「支那の核心を觀よ 对支干渉論を排す」(大正一〇・八・二五『東京朝日新聞』)。
- (16)同前、「(2)」(大正一〇・八・二六『東京朝日新聞』)。
- (17)『支那游記』自序、『芥川龍之介全集第一三巻』、一〇五頁。
- (18)紅野敏郎『近代日本文学における中国像』(昭和五〇・一〇)有斐閣選書)九二頁。
- (19)趙夢雲『上海・文学残像—日本人作家の光と影』(平成一二・五)田畑書店)六七—六八頁。
- (20)浮田和民「新聞紙及新聞記者論」(大正六・一〇『新時代』)、一六頁。
- (21)同前、十八頁
- (22)生田長江「通俗芸術の問題」(大正六・二『新小説』、引用本文は、『編年体大正文学全集第六卷』(平成一三・三)ゆまに書房)四三八頁。
- (23)中村星湖「最近小説界の傾向」(大正六・一〇『新時代』、引用本文は、同前、五二六頁。
- (24)本間久雄「ジャーナリズムと文学」(大正六・一二『早稲田文学』)、引用本文は、同前、五四七頁。
- (25)水上瀧太郎「貝殻追放 新聞記者を憎むの記」(大正七・一『三田文学』)、引用本文は『編年体大正文学全集第七卷』(平成一三・五)ゆまに書房)四三二頁。
- (26)平林初之輔「一兵卒の立場から」(大正九・一一『新潮』)、引用本文は『編年体大正文学全集第九卷』(平成一三・一二)ゆまに書房)五四六頁。
- (27)「奇遇」(大正一〇・四『中央公論』)、芥川龍之介全集第七巻、二八一頁。
- (28)中村星湖「老熟、聡明、頓知(十二)」白鳥、菊池、芥川三氏の作 四月の創作評」(大正一〇・四・一五『読売新聞』)

- 聞)、引用本文は、『芥川龍之介研究資料集成第一卷』(平成五・九 日本図書センター)、三二二頁。
- (29) 「大正一〇年五月二日付佐佐木茂索宛書簡」、同前、書簡番号九五五番。
- (30) 『芥川龍之介全集第八卷』、一四頁。
- (31) 同前、一九頁。
- (32) 同前、三二頁。
- (33) 同前、一九―二〇頁。
- (34) 同前、二〇頁。
- (35) 同前、二四頁。
- (36) 祝振媛『支那游記』(平成一一・一一『解釈と鑑賞』)、一七頁。
- (37) 周恩来『旅日日記』、引用本文は、鈴木博訳『周恩来「十九歳の東京日記」』(平成一一・一〇 小学館)、一四六―一四七頁。
- (38) 『芥川龍之介全集第一五卷』、二六〇頁。
- (39) 同前、一〇頁。
- (40) 同前、一三頁。
- (41) 同前、四四―四五頁。
- (42) 「大正一一年五月西村貞吉宛書簡」、『芥川龍之介全集第一九卷』、書簡番号一一二一番。
- (43) 「大正一〇年九月二〇日付佐佐木茂索宛書簡」、『芥川龍之介全集第一九卷』、書簡番号一〇二一番。
- (44) 「大正一〇年九月一四日付森鷗外・与謝野晶子宛書簡」、同前、書簡番号一〇一〇。
- (45) 「文芸雑談」(昭和二・一『文芸春秋』)、『芥川龍之介全集第一四卷』四二―四三頁。他にも、「抒情詩等の詩歌を例外とすれば、あらゆる文芸はジャアナリズムである。のみならず新聞文芸は明治大正の両時代に所謂文壇的作品に遜色のない作品を残した。徳富蘇峰、陸羯南、黒岩涙香、遅塚麗水等の諸氏の作品は暫く問はず、山中未成氏の書いた通信さへ文芸的には現世に多い諸雑誌の雑文などに劣るものではない。(略)のみならず新聞文芸の作家たちはその作品に署名しなかつた為に名前さへ伝はらなかつたのも多いであらう。現に僕はかう云ふ人々の中に二三人の詩人たちを数へてゐる。僕は一生のどの瞬間を除いても、今日の僕自身になることは出来ない。かう云ふ人々の作品も(略)僕に詩的感激を与へた限り、やはりジャアナリスト兼詩人たる今日の僕には恩人である。(略)僕等は彼等と職業的に何の相違も持つてゐない。少くとも僕はジャアナリストだつた。今日もなほジャアナリストである。将来も勿論ジャアナリストであらう。」という用例もある(「文芸的な、余りに文芸的な」「二十 ジャアナリズム」(昭和二・四『改造』、『芥川龍之介全集第一五卷』一七八―一七九頁)。
- (46) 石割透「ジャアナリズム」(昭和六〇・一二『芥川龍之介事典』明治書院)、二四〇頁。

(あいかわ なおゆき)